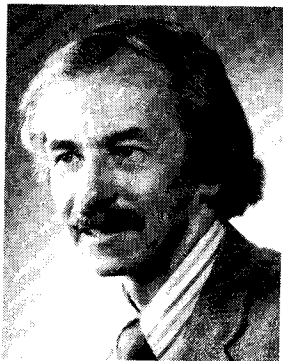


国際研究集会 Workshop on Biocalorimetry の 招待講演のため来日予定の四博士のプロフィール

Dr. S. J. Gill



1929年Utah州Salt Lake City生まれの49才。Harvard大学卒業後Illinois大学で研究を続け、1954年Ph. D.を取得。その後Cornell大学研究員などを経て1956年Colorado大学の化学科助教授として招かれ、1960年準教授、1964年教授、現在に至っている。スポーツマンで昨年、Ronnebyで行われた第5回国際化学熱力学会議の時は、同伴のお嬢さんと会議の合間にテニスコートを走りまわっていた由。京都には夫人同伴で来るが、ラケットを持って現われるに違いない。

秀れたアイデアで今までに研究目的に合致した立派な熱量計を開発している。例えば水に僅かしか溶けない炭化水素の水への溶解熱を測定する熱量計や、独自の開発になるフロー型熱量計などがある。生体高分子を扱う研究者のみならず溶液内分子間相互作用に興味をもつ物理化学者にとって無極性化合物の周囲の水の構造は研究対象として重要であり、この分野の研究には水溶液中に存在する疎水性相互作用の評価が不可欠であるが、実験が困難なために今まで信頼するデータがなかっただけに彼の研究はこの問題に対してkey dataを与えたことになり、非常に意義深いものである。

これらの熱量計は彼の最近の研究テーマである熱力学的立場からの生体高分子、およびそのモデル化合物の溶液内における相互作用の研究に十分に活用されている。とくに、種々の形のヘモグロビンとリガンド(CO , O_2)との結合熱を種々のpH緩衝溶液中で測定し、貴重な知見を導いている。(村上幸夫)

Dr. P. L. Privalov



昨年Lund大学で行われた生物熱力学国際合同委員会で筆者の隣りに坐ったのがPrivalov教授。にこやかに握手してPeterと呼んでくれという。プロコフィエフの「ピーターと狼」を連想する迄もなく、固有名詞の記憶力の怪しくなった筆者にもこの名前は親しみ易く、憶えやすい。温厚な人柄で口数も多くない。

1932年、コーカサスのTbilisi生れ。Georgia大学物理科学生時代Schrödinger著“*What is Life*”に感銘して生体系の熱力学的研究に取り組むことを決意。現在、ソビエト科学アカデミー所属の蛋白研究所熱力学部門のヘッド。彼の苦心の作である走査断熱型マイクロ熱量計は一作年来日のSturtevant教授お墨付きの世界一級品。プロトタイプは1969年、ワルシャワでの第1回化学熱力学国際会議で発表され、コラーゲンの融解やDNAなどの変性に伴う熱量測定に用いられている。その後、種々の改良が施された洗練板が*J. Chem. Thermodyn.* に発表され、これを駆使して種々の生体高分子の熱力学的安定度の決定、変性過程の熱力学的研究を強力に押し進めている。その大要はモンペリエでの第4回化学熱力学国際会議での招待講演で明らかにされ、*Pure & Appl. Chem.* に詳しく収められているので御存知の方も多であろう。

この装置はソビエトには珍しく商品化されていて、モンペリエでの会議で展示された由。かつてWadsö教授が彼の研究室を訪問した際、その装置を全く見せて呉れなかったと不満を洩らしていたが、どうやら商品開発時であったらしい。今回、Privalov教授の厚意ある申し出で、この装置が今度の研究集会に展示されるかも知れない。初めて訪れる日本に大いなる期待を抱いている由。こちらも彼の明快な講演に大いに期待したい。(菅 宏)